
フォーカード？ いや、革命だ！

妖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フォーカード？ いや、革命だ！

【Nコード】

N2014Y

【作者名】

妖

【あらすじ】

人間界、魔界、天界……この三界で成り立つ世界

この物語は魔界の家庭教師？が引っかき回したり、引っかき回されたりするお話です

※これは更新したとしても順調に行けるかどうかともわからない大分チャレンジ要素の多い作品となっております

そんなんですが時間があるときにでも、ちょっとのぞいていただけたら嬉しいです

オープニング

豪華な調度品、大きなベッド、どこか禍々しい雰囲気。

外は暗く、遠くからは何かの叫び声が聞こえる。

そう、ここは魔界。

争いが絶えず、凶悪な悪魔が跋扈する闇の世界。

そんな物騒な場所で話は始まる。

「あゝあ．．．．．つまんねえなあ」

「いやいや！」

お前ボクの家庭教師だろ！？

つまんないとかじゃないだろ！」

「．．．．．なあエミール、なんかおもしれえことないか？」

「ボクの話聞いてた！？」

「オオ！　そう言えばアイツ地獄にいるんだったな．．．．．ちよっくら行ってみるか！」

「だから聞けーーーー！！！！」

我が道を行くマイペースな男を止めようとするフードを被った男の子。

彼らは一体何者なのだろうか．．．．．それはまだ謎に包まれている。

少年が腰の辺りに飛びつくと、男は立ち止まり振り向く。

「わかってるって．．．．．（お前のオヤジにも頼まれてるしな）」

「ホントか!？」

っていうか父上も、なんでお前みたいな不真面目なやつを家庭教師につけたんだ？」

「そりゃあ、俺が優秀だからだろ？」

「はいはい………でお前父上と何処で知り合ったんだ？」

「信じてねえな、まあいいけど。」

ハゴスと出会った場所か？

あゝ………何処だったかねえ」

「だから父上の名前を呼び捨てにするなって！

父上は魔界大統領だぞ!!

その気になればお前なんか小指一本で殺せるんだから気をつけろよ
！」

「ああそうだったな、小指一本………ねえ」

男は少年に見えないように小さく笑う。

その顔はまさに獰猛な野獣の様な笑みだった。

どうやら男は少年に隠していることがあるようだ。

少年が気付く前に獰猛な笑みを引っ込めると、代わりに胡散臭い笑みを浮かべる。

「そう言えばお前はボクよりも長生きしてるんだから、二つ名の一つでもあるんじゃないのか？」

「二つ名………なくはねえけど、餓鬼には教えれねえなあ」

「またボクをバカにして………ハア」

「お前はまだまだ子供さ、だがまあ………今日の模擬戦で良い成績を残せたらお前の質問に一つだけ答えてやるよ」

「ホントか!？」

「ああ、本当だ。」

悪魔はウソはついても、約束は破らないもんだ」

「絶対だからな！」

そう言い残すとエミールは部屋から走って出て行った。
その後ろ姿を苦笑しながら見送る男。

「まったく……ハゴスには微塵も似てねえなあ」

「余計なお世話だ」

「うお！？」

いきなり後ろに出てくんなよ！」

「フン、お前が隙だらけなのが悪いのだろう？」

「真後ろに転移されて気付ってのは、なかなか無茶言ってくれるぜ」

男の後ろに音もなく現れたのは、エミールの父で魔界の大統領ハゴス。

その本当の姿を見た者は魂すら残さず消滅するとまで言われている男だ。

そんな人物に家庭教師の男は親しげに話しかける。

「で、まだ動かねえのか？」

もし暴れるってんなら手を貸してやってもいいぜ？」

「……………それはできません。」

だからこそお前に下げたくもない頭を下げたのだ」

「はあ……………つまんねえ。」

昔のお前だったら、もっとハッチャケてただろうに」

「お前には、まだわからん（自身の身よりも優先すべき者がいない

お前にはな)」

「わかってると思うが、来年までだぞ？

そう言う約束だからな……」

「ああ、それで借しは帳消しだ。

頼むぞ、アグニス」

そう言い残すとハゴスは転移の術式で執務室へと移動した。
残された男は小さくため息をつく。

「ここではアグニって呼べよな、何のための偽名だったの。

それにしても、はぁ……つまんねえなぁ。

とりあえずあの餓鬼ほつといたらうつせえし、様子でも見に行くかね！」

男はポケットに手をつっ込み部屋を出て行った。

今は昔、人は闇を恐れていた。

闇を恐れ生きることでは慎ましく生きることができていたのだ。

しかし……人間の科学力が進化することで、徐々に闇を恐れることがなくなってきてしまった。

これはそんな人間たちを戒めるものたちの物語である……
かもしれない。

「くっそ、あの時アグニが声をかけてこなければ勝てたのに！」
「そんな簡単に注意を逸らすお前が悪いんだろ？」

話しながら廊下を歩いているのは、所々に小さな傷を負ったエミールとどこか楽しそうなアグニである。
どうやら訓練は惜しいところで失敗したようだ。

「というわけでお前の質問には答えないからな」

「少しぐらい、いいじゃないか！」

「約束は約束だからな」

「ちえっ」

不満はあるが、これまで短くない時間を共に過ごしてきて彼が折れないことを知っているエミールは諦めることにした。
その子供っぽい反応に苦笑しながらアグニは軽く頭を撫でる。

「まあ、惜しいところまで行っただ。次はイけるだろうよ」

「……当たり前だろ！」

ボクは魔界大統領の父上を持つ死神、エミールだぞ！」

「そうだな……」。

まあ俺はお前自身を評価してるんだがな」

「同じ意味じゃないのか？」

「いつかわかるさ……（こういうのは自分で気付くもんだしな）」

不思議そうに首を傾げる少年の頭をさつきよりも強めに撫でると、突然立ち止まった。

そしてアグニは前方の柱を睨みつける。

「オイ、そこにいるヤツ出てこい」

「……貴様に気付かれるとはな」

そう言って柱の陰から現れたのはハゴスの側近兼秘書をしている魔界三豪傑の一角、雷帝サイロスだった。

その顔はどこかアグニを侮蔑している様だ。

しかしそんなことを微塵も気にせず、気配を殺して待っていた理由を尋ねる。

「お褒めにあずかり、恐悦至極……で、なんの用だ？」

「チッ、生意気な。」

貴様の様な何処の馬の骨とも知れぬ輩にご子息を預けるとは、あの方は何を考えておるのだ？」

エミーゼルを見て、ため息をつくサイロス。

その溜息にエミーゼルは下を向き、小さく肩を震わせる。

アグニはそれを見て小さく舌打ちすると、少しだけ前に出てサイロ

スの視線を遮った。
するとサイロスは視線をアグニの顔に移し、鼻で笑う。

「用があるなら、早く言え。」

俺は早く部屋に戻りたいんだよ」

「ああ、そうだったな。」

「……………大統領閣下がお呼びだ。」

直ちに執務室へと来るように」

「わかった……………それだけか？」

「本当に生意気なやつめ……………あんまり調子に乗らないことだ。」

お前なんぞ、私にかかれれば一瞬で消し炭に出来るのだからな」

「はいはい、わかったわかった。」

魔界三豪傑様は忙しいんじゃないのか？

俺なんかに構ってないでさっさと行ったらどうだ」

「チッ！」

自分の脅しに微塵も恐怖を感じていないアグニに苛立ちを感じつつも、サイロスはその場を去っていった。

消えてからもしばらくサイロスの去っていった方向を見ていたアグニだったが、ふと自分の服の裾を掴んで震えている存在に気付く。

「……………どうした？」

「なんでアグニはサイロスが怖くないんだ？」

いや、サイロスだけじゃない。

お前が戦つてるところはあんまり見たこと無いけど、強さは精々中級悪魔くらいだろ？

なんで自分よりも強い相手にあんな風に接することが出来るんだ？」

「なんでって言われてもなあ………なんとなくだな」

「なんとなく!？」

「まああえて言うなら、俺はハゴスに頼まれて来てるわけだから、ハゴスの部下であるアイツらは手を出してこないだろうからな」

「それでも、もし隠れて手を出して来たらどうするんだよ!

お前死んじゃうんだぞ!!」

「そんな時はそんな時ってこ」「そんなの嫌だ!」………大丈夫だって、俺はお前が思ってるほど弱くないんだぜ?」

顔を歪め、目に涙を溜めて叫ぶエミーゼルに少し驚いたアグニだったが、その場にしゃがみ込んでエミーゼルに視線を合わせる。

「それに俺だって死ぬ気は無い。

目的もあるしな………だからあんまり心配するな」

「し、心配なんてしてない!!」

た、ただお前がいなくなったら家庭教師が居なくなって困るから………」

「ああ、わかってるって」

目を袖で拭いながらそっぽを向くエミーゼルの苦笑しながら見つめる。

そしてスッと立ち上がりエミーゼルに背を向けた。

「もう大丈夫だな………さてっと、じゃあ行くとするかね」
「何処に行くんだ?」

「どうやらハゴスが俺に用があるみたいだからな」

「あ」

「忘れてたのか……まあいけどな。」

お前は部屋に戻って、今日の訓練の反省点を纏めとくように。
特に最後の魔法の撃ち合いのことな」

「わかった」

「よし、じゃあな」

アグニはエミールに背を向け、廊下の曲がり角へと消えていった。
その背中に向けて小さく呟いた「ありがとう」という言葉はアグニ
に届くことはなかったが、その気持ちは伝わっていたことだろう。

第1話（前書き）

一人お気に入り登録していただいたので、二話目も上げます

第1話

執務室の前に着いたアグニは、ノックもせずにいきなりドアを開ける。

すると中には豪華なイスに座った魔界大統領ハゴスの姿があった。

「来たぞハゴス、何の用なんだ？」

「・・・・・・ノックぐらいしろ。」

もし我以外に誰か居たらどうするつもりだ」

「お前以外の気配感じなかったし、実際居なかったんだからいいだろう？」

「はぁ・・・・・・もういい」

ため息をつき、首を小さく横に振るハゴスだったが、やはりアグニはまったく気にしてない。

それどころか何故か胸を張っている位である。

気にしていたら話が進まないと思ったハゴスは、早速用件の説明に入ることにした。

「お前を呼んだのは他でもない・・・・・・地獄を知っているな？」

「ああ、そりゃあな」

「では地獄に『暴君』が居ることはどうだ？」

「一応は知ってる。」

そういえばアイツ地獄でなにやってんだ？」

アグニの質問にハゴスは顔を顰める。

何故そんな顔をするのかわからない彼は首を傾げるが、ハゴスの次の言葉にその顔は驚愕に染まる。

ちなみにここで言う『暴君』は、ある悪魔の二つ名である。

「……………係だ」

「何だって？」

「プリニー教育係だ」

「ふーん……………って、はぁ!？」

ここでデイスガイアを知らない人に説明をしておく、プリニーとは生前に罪を犯した人間の魂をペンギンのぬいぐるみのような物に詰め、その罪を誰かに尽くすことで償うという存在である。

投げられると爆発することから、爆弾の様に使用される場合もあるので非常に過酷な償いと言えなくもない。

追記するとプリニーには心得が存在し、一番最初の心得は語尾に「ッス」を付けると言うものである。

「なんでまたそんな仕事してんだ？」

「理由は知らんが、魔力を失っていることと関係があるのではないか？」

「アイツまだ血吸ってないのか!？」

何百年経ったと思ってんだよ……………」

「あやつの約束に対するこだわりは、凄まじい」

二人は昔の暴君を思い起こし、懐かしんだ。

決して心温まる思い出など無いが全力で戦っていたときは、まるで恋人との逢瀬のように心躍ったものである。

しかしアグニはここに昔の知り合いの話をしに来たわけではない。

「で、アイツがどうしたんだ？」

「結論から言うと、地獄で暴れ始めたようだ」

「ほう！ そりゃあ面白い事になってるな！！」

「面白がっている場合ではないぞ」

「俺にはあんま関係ねえしなあ」

「いや、関係はある」

「は？」

アグニは現大統領府に隷属しているわけではない。

故に暴君が政府転覆を企もうがあまり関係ないのだが、ハゴスが言うにはどうやら関係があるようだ。

その理由を聞くために耳を澄ますアグニ。

「先ほど反逆を止めようと地獄へ刺客を放ったのだが、撃退されたようなのだ」

「腐っても『暴君』だな。」

吸血鬼の頂点は伊達じゃないってことか」

「茶化すな。」

「……そこで援軍を送ることにしたのだ」

「誰を送るんだ？」

その言葉を受けて、ハゴスの表情が歪む。

まるで自分の身が切られる苦痛を感じているように。

「なんだよ？」

「アバドンだ」

「特殺任務部隊か……って、おい！

あの部隊のトップは！？」

「そうだ、我が息子……エミーゼルだ」

特殺任務部隊『アバドン』とは、その昔魔界が荒れていたときに猛威を示した部隊である。だが現在は名前は物騒だが今まで実戦経験も殆どなかったお飾り部隊であり、構成メンバーも若く余力のない悪魔で構成されている。

そんな部隊の隊長を、何故大統領の息子が務めているのかは……
……いずれ語るときが来るだろう。

「アイツをまだ実戦に出すのは早いぞ！
その任務は魂を狩ったことのない死神にとって、荷が重すぎるだろうが！」

「それは分かっているつもりだ。

しかし反逆者の処理は特殺任務部隊の仕事だ」

「……どうしても行かせるのか？

下手するとあの餓鬼死ぬぞ」

「大統領として特例扱いは出来ん」

組織のトップは常に冷静且つ客観的な視点を持たなければならない。
例えばそれが自分の息子の危機に繋がろうとも……。

「話は分かった。

だが俺を呼んだ理由が分からねえ。

お前は俺に何をさせたいんだ？」

そう聞くとハゴスはイスから立ち上がってアグニに向かって歩き始め、アグニのおおよそ2メートル手前で立ち止まった。その目には強い意志が宿っている。

「頼む……息子に付いてやってくれ。

自由に動けるのは貴様だけなのだ。

部下を使えば公私混同と言われ、内部で反乱が起こるかも知れん」

「貴様は今の魔界の現状を知っているだろう。

地獄では現政府に不満を持っている者も多い。

……それに『彼奴』のこともある。

だから頼む」

そう言って深々と頭を下げる姿は、魔界大統領ハゴスではなく、一人の父親の姿だった。

アグニはその姿を見て、一端何かを考えるように目を瞑る。

そしてゆっくりと目を開けた。

「俺もアイツほどじゃないが、交わした約束は守る。

俺がお前と交わした約束は、過去の借りを帳消しにする代わりに息

子の面倒を見ること。

「……エミールに近くに居ないと面倒を見れないだろう？」

「……すまんなアグニス」

「……俺は約束を守るだけだ」

こうしてアグニの地獄行きが決まった。

ちなみにアグニは地獄へ行ったことがなく、地獄に何かあるのかと顔には出さないが若干楽しみにしている。

地獄のことを考えていると、ふと一つの疑問が思い浮かぶ。

「そういえばアイツは、なんで反逆始めたんだ？」

「今プリニーの数が増えすぎているのは知っているな？」

「まあ一応な」

「故にプリニーを出荷せずにある程度処分する事にしたのだが、その処分するプリニーがアヤツの教育していたプリニーだったらしいのだ。

アヤツはそのプリニーどもに、出荷する前にイワシを馳走する約束をしていたらしい。

その約束を守るためだと聞いている」

「……変わらないなあアイツ」

「そうだな」

「だが何故イワシなんだ？」

「……知らん」

これから戦うかも知れない相手のことを思い出しながら、何故か少し和んだ二人だった。

果たして地獄には何が待ち構えているのか？

そして『暴君』とは一体どんな悪魔なのか？
全ては地獄で明らかになる。

第1話（後書き）

エミールマジ天使w

……まあ俺が一番育てたのはデスコなわけだけでも！

今なら結構安い値段でディスガイア4は買えるので興味がある方は是非

ちなみに後日談やアペンドディスクの敵は結構レベルが高いので、もしやるかたはお気をつけを……レベル5000とかだよ？

いやまあ、後日談の最後に出てくる奴が一番鬼畜なわけだけでも一度した攻撃はダメージゼロで、こっちは相手の攻撃食らえばほぼ確実に死ぬという中々の鬼畜っぷり

装備整えて、装備品のレベル上げて、一気に落とすのが常套手段

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2014y/>

フォーカード？ いや、革命だ！

2011年11月10日13時00分発行